

【巻頭言】

「人権と共生の世紀」を実現するために

元板野中学校長 漆原都夫

私どもは長い間、20世紀中に部落差別をはじめとするあらゆる差別をなくし、21世紀を「人権と共生の世紀」にしようと努力して参りました。

国際連合は1948年の「世界人権宣言」から1995年の「人権教育のための国連10年」まで、数多くの人権関係の条約・宣言を制定しております。また、我が国でも1946年「日本国憲法」制定以来、2001年「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」まで、基本的人権を守るための数多くの施策を実施してきました。

学校教育でも、社会科教育で人権の歴史から憲法の基本的人権まで、人権問題について指導してきました。そして、1958年以来、道徳学習、1967年以来、人権・部落問題学習で「人命・人権・人格の尊重」ということについて共に考えて参りました。

しかし、残念ながら、これらの施策や教育が、十分な成果を上げてきたとは言えない現実があります。

世界的に言えば、2001年9月のアメリカにおける同時多発テロ、それに対するアメリカの報復戦争と日本の追従ぶりや国内の政治的状況は、まさに弱者いじめ、人権無視としか言いようがありません。戦争や不況はいつも弱者の人命や人権を奪うものです。

学校現場においても、登校拒否ー不登校、校内暴力ー学級崩壊などイヤな言葉が教育界に広がり、マスコミが学校不信、教師不振をあおるように、針小棒大な報道を続けた結果、学力低下をはじめ、いろんな問題が一層ひどくなってきている感じがします。

いつも時代にも、学校に来られない子、授業がまともに受けられない子はいたはずですが、そうした子に対し、親、教師、友だち、隣人たちの協力で、多くは解決できております。

しかし、そうした人間関係が薄れていき、子どもが孤立化し、学校でも、学力偏重の名のもとに、道徳教育や同和教育が軽視されてきたことも、現在の荒廃の一因があると思います。

学校教育で、道徳教育が始まって40年余、同和教育が始まって30余年が過ぎましたが、残念ながら中学校現場には定着しないままに20世紀が終わり、21世紀に入って、新学習指導要領で、心の教育とか人権教育とか総合学習が言われていますが、現場の先生方に問われていく課題は大きなものがあります。

「教師がやる気を出せば、生徒も本気で取り組む」ということを森口先生は中学校教師になって見事に実証してくれました。

早いもので、森口先生が教師になって20年、私が彼と出会って18年になります。その間いっしょに勤務したのは4年しかありませんが、彼の授業を機会あるごとに参観し、彼の記録をほとんど読ませてもらい、いろいろ話し合うことによって、同和教育をはじめ、教育の本質について教えられ、考えさせられることが多々ありました。

このことは、一度でも板野中学校の全体学習を参観していただいた方はおわかりでしょうし、今までに出版された彼個人の実践記録『よろこび』（全3冊）や板野中学校全体学習の実践記録『峠を越えて』（全10冊）を1冊でもお読みいただければ、おわかりになると思います。

森口先生は、板野中学校勤務10年を機に、鳴門教育大学大学院生として、2年間研究生活に入り、最近「社会科人権学習の改善」－「内省」を目標原理とする中学校社会科授業の展開－と題する修士論文をまとめられました。これも是非お読みいただきたいものです。

その上で、今までの研究・実践をまとめて『峠を越えて』－全体学習が拓く教育のよろこび－を出されたわけですが、本書をご覧いただいたらおわかりのように、彼は一人の人間として、一教師として、生徒と共に「美しさを求めて生きる人生を」いかに充実するべきかを考察し、追究しております。

まず、学級初めに、生徒との人間関係づくりを構築する学級開きから、保護者とのつながりを深め、生徒に学校生活をいかに考えるべきかを問う詩『峠』（真壁仁）を資料にした参観授業、そして、一人一人の生徒や家族とつながる家庭訪問と、学年早々から相互の共感的なつながりをつくるための努力の跡がよく伺えますし、人との出会いを大切に彼の人間味がよく出ており、学年初めの学級づくりの参考になると思います。

こうした実践から全体学習へと発展していくわけですが、一学級の公開討論を学年全体が参観して、次の時間、共に語り合うようにしたものです。時には全校生（約500名）で全体学習に取り組み、さらに、いつでも、だれでも参観に来られ、全体学習に参加して発言してくれるようになり、生徒一人一人が生き返った思いがしました。こうして、生徒が自分の思いを、時には涙と共に率直に語るようになると、教師も指導案の中で、自分自身を語り、授業中にも自分自身の思いを自然に語るようになっていきます。

森口先生の授業実践で注目すべきことは、道徳教育、同和教育の違いより、共通面を求めて授業実践をしていることであり、さらに社会科教育、総合学習まで、幅広く取り組んで、生徒一人一人と共に、人間としてよりよく生きるためにはどうあるべきか、どうしていくべきかを真摯に考え、真剣に話し合い、謙虚に実践していこうとしているところにあります。

板野中学校での全体学習が10年以上続いているのは、森口先生はじめ多くの先生方や生徒たちが、自分自身の生き方の問題として、積極的に取り組んできたからだと思います。

そして、こうした実践を校内だけにとどめず、板野高校、小松島立江中学校、遠く京都市弥栄中学校の仲間を拡げているところに、森口先生と板中生のすばらしさがあります。

どうか、本書をはじめ、森口先生と板中生の実践の跡を読むことによって、難問多い現代の教育について改めて考察し、全体学習の実践もしていただくことを期待しております。

21世紀を「人権と共生の世紀」にし、生徒たちがたくましく「生きる力」を培うよう、お互いに研究・実践を続けていきたいと思えます。